



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.48 (2014.2.17)



社会連携センターでは、グローバル人材育成の観点から、学生が参加できるプログラムが企画・実施されています。その一つ、東京の在日アメリカ大使館でのインターンシップ・プログラムが2012年夏に始まり、今年度夏期休業中には、2人目の参加者となる国際学部4年生の森山彩絵さんが派遣されました。以下に、森山さんの体験談をご紹介します。今後参加してみたい学生の皆さんの参考になることと思います。

今回の派遣は春期休業期間中で既に参加者が決定していますが、その後は、来年度夏期休暇時のインターンシップ参加者を募集予定です。宿泊費・交通費を対象に、大学から1人上限75,000円の補助金も受けられます。

お問い合わせは、社会連携センター (tel: 082-830-1764) まで。

目次:

在日アメリカ大使館インターンシップ体験談

国際学部 森山彩絵さん.....1

ミニコラム: 芸術学部 秋山隆先生.....2

知のトライアスロン映画上映会.....2

JiCafe 登場!.....2

うろたえる桃とたじろぐ赤の単刀直入

名誉教授・芸術資料館もと館長

大井健地先生.....3

「隣国ロシア、ハバロフスク便り」

国際学部 齊藤華織さん.....4

日本イェイツ学会.....4

在日アメリカ大使館インターンシップ体験談

国際学部4年 森山彩絵



2013年8月5日から9月12日の間、東京アメリカ大使館商務部でインターンシップを受けました。私は将来、アメリカで働いてみたいと考えていたため、商務部でのインターンシップはアメリカビジネスを学べるよい機会だと考え、また、

春から社会人として働く前にインターンシップを通じてさらに成長したいとも思い、志望しました。

仕事内容について

9:00 から 17:00 まで、約一ヶ月の間、商務部のオフィスで働きました。私は主に Select USA という対米投資関係のお仕事の手伝いをしました。米国で開催される対米投資の会議への参加依頼状を作成した時には、送付先企業の代表者と所在地の英語名を確認してリストを作成し、レターの印刷を行いました。日本の大企業の代表の方々に宛てたレターであったため、ミスがないように緊張しながら作業をしました。また、商務部が参加するイベントのお手伝いもしました。イベント会場では、商務部ブースへの来訪客の対応をしました。イベントでは多くの企業の方々とお話を頂く機会があったため、有意義な時間となりました。また、実際の商談の風景も見ることができました。他にも、商務部で使用する Handbook の作成、リスト作成、データ入力、電話対応などをしました。



ジャパン・シーフード・ショーの様子

大使館でさまざまな経験

大使館でのインターンシップ中に、オハイオ州主催のレセプションや大使館職員寄宿舎でのレセプションに参加しました。特に、大使館職員寄宿舎でのレセプションは、普段入ることができない場所でのレセプションだっただけに、とても思い出に残っています。また、ルース元大使の退任スピーチを直接聴講する機会もありました。商務部の方々は非常に私に気を遣って下さり、さまざまな場面で助けてくださいました。また、アメリカから来た他のインターンシップ生達と交流できたことも、アメリカでの大学生活を知るよい機会となりました。

インターンシップを通しての感想

多くの経験を持つ、商務部や企業の方々と交流することで、今後の社会生活における人とのネットワークの大切さや仕事への責任を実感しました。また、アメリカ文化が主流の大使館で「謙虚すぎず、積極的に動く」ことを学び、実践できました。アメリカ大使館でのインターンシップの経験を活かしながら、今後はアメリカで働くことを目指し、言語やビジネスの勉強をしていきたいと思います。



インターンシップ修了証が交付されました



アメリカ大使館
商務部ロゴ

ミニコラム 外国語に想う【43】

「メニューから」

芸術学部 彫刻専攻
講師 秋山 隆



「思い出と共に」

以前、文化財（主に仏像）調査の関係で、1ヶ月半程韓国に滞在する機会を得たが、渡航までの期間も無かったことから韓国語については自己紹介を憶えた程度で全くと言っていい程勉強して行かなかった。

「現地でお世話になる李先生も東京藝術大学で博士号を取得されているし、この期間なら日本語だけでも何とかできるだろう」という甘い考えを持っていた。しかし、現地では当然の結果が待っていて、面白い様に身動きがとれない。困った。食事をとろうと店に入るもハングル表記しか無いし、簡単な英語も伝わらない。文字が読めないので注文は指差しと簡単な韓国語のみで、かなり無愛想な客と思われたに違いない。

写真を指差すだけでも注文はできるだろうが、せめてメニューの文字ぐらひは読んで注文したいと、動機は不純でも言語に対して興味が湧いた瞬間だった。

街中に溢れる文字を写真に収め、夜の時間を利用してそれをノートに書き写し翻訳機で確認してみるといった事を毎日繰り返していると、何とか地名や、韓国料理で馴染みのあるメニュー等は目で追える様になって来た。（今思うと、制作以外であんなに頑張った経験は無いのではないだろうか。）

喋れなくては意味がないと言われるかもしれないが、読める様になってくるだけでもやはり面白い。多少の恥をかくことで得た貴重な体験であった。

2013 年度後期 知のトライアスロン映画上映会開催 🍀 ヨーロッパのアニメーション特集

12月2日（月）～12月6日（金）に、今年度は2回目となるいちだい知のトライアスロン映画上映会を開催しました。今回は、国際学部のルディムナ先生にご協力頂き、「言語・コミュニケーション研究入門」との連携企画で行いました。ルディムナ先生、シュラトフ先生には映画の解説もして頂き、前期に引き続き、大盛況な上映会となりました。来年度も映画上映会を予定していますので、次回もお楽しみに！



ルディムナ先生解説の様子



シュラトフ先生解説の様子

テーマ：ヨーロッパのアニメーション特集 「動画は君の心を動かす」

映画解説：12月4日（水）12：50～14：40 ルディムナ先生「タンタンの冒険～めざすは月・月世界探検」（フランス）

12月6日（金）13：00～14：40 シュラトフ先生「霧につつまれたハリネズミ・話の話 他」（ロシア）

その他上映映画：「アーサー・クリスマスの大冒険」（アメリカ・イギリス）、「イリュージョニスト」（フランス）、「ベルヴィル・ランデブー」（フランス）、「チェブラーシカ」（ロシア） ＊番外編：「レ・ミゼラブル」（フランス）

JICafe 登場！賑わうホール

2013年4月8日（月）と10月1日（火）～10月20日（日）に、昨年度の青年海外協力隊パネル展に続き、フェアトレードコーヒーや世界のお菓子も提供する「JICafe」が開催されました。JICafeとは、JICA中国が主催で、青年海外協力隊経験者とざっくばらんに話しながら、国際協力を身近に感じてもらうイベントです。語学センターホールに彩りよく展示されたパネルの横で、世界のフェアトレードコーヒーとお菓子も配られ、立ち寄った学生たちは、青年海外協力隊経験者の方からの話を熱心に聞いていました。今後、世界で活躍する学生が参加者の中からも出てくるといいですね。



JICafeの様子
語学センターホールにて



詩のお弁当 (2)

うろたえる桃とたじろぐ赤の単刀直入 小池昌代の下痢をする

大井健地 (名譽教授・芸術資料館もと館長)

2000 年までその街は英語名でカルカッタと呼ばれた。今は違う、ベンガル語で本来のコルカタ。

2009 年早春、小池昌代 (1959-) は詩聖タゴールの生地でもあるこのインド旧首都を訪れ、翌年詩集『コルカタ』思潮社、を刊行した。

湖の睡蓮の大きな葉に乗って眠り沈む性夢は《植物園》という詩。《決心》、これは汚いトイレの詩。次は《お前さん》の中程のあたり。

「下痢くらい ひとを真実に目覚めさせるもの
はない／印度へ行きましょう／そう言われたとき
に だから思ったのよ、
きつと下痢をすると予感したのだ。

「まったくそのとおり
だった／最初は 水のよう
ピー シャー ピー
／そのうち固まるだろう
と
思っていたら／最後ま
で グズグズ ビチャビ
チャ ジー」。

下痢を「お前さん」扱いし、
「印度にいけば 会える親友」と呼ぶ。

すべてが夢だったようなコルカタ経験で、「お前さん」だけは真実の「わたし」を覚醒してくれる。

『コルカタ』は朱一色のカバーで包まれる。見返しはからし色。扉は深い青色刷り。(てっきり菊地信義装丁と思ったが版元社内装だった。) カバーをめくるとこちらがうろ

たえるような桃色の表紙。はじらいを秘めてもいるような、ムラムラした感もある。生命あることのはずかしさに火照ってくる思いの桃の色彩。

「わたしはかつて、ドーベルマンに、股のあいだをなめまわされ、かみつかれるという恐ろしい夢を見たことがある」(『井戸の底に落ちた星』56 頁) なんて！

そんな夢も、それを活字にするのも、変だとは言えないけど。

「わたしは、男性用の香水で好きなものがあるが (名前は知らない)、それを嗅ぐと、ふらふらっとなって、たちまち脱力してしまう」(同書 185 頁) なんてのも敏感で率直、でも危ない。

「それは、たとえば、林檎を素手で二つに割るような、すがすがしい暴力、そのようなものに自らを割られ、内臓を外気にあてられた驚き」(《太古からの声》) というのはどうか。「それ」は男たちの笑い声の比喩

なのだ。女の芯に響いた、と僕は解する。

白昼の生活の端っこにも真夜中の夢の襲来にも恐ろしいほどに迫まるものが満ちている。それが人間のこの世だ。

おしっこの最中である自分に気づくのは、おねしょがもう始まってからだ。抑制のタガがはずれるためには夢に小便器アイコンが出現せねばならない。

ヌツと、遠慮のない事柄が突き出される。小池昌代の前に、そして小池昌代から。

「性交」という語がゴロンと目前にあって、つまり

平然と用いられてあって、あなたはというつもりでこのことばをここで使っているのですかと問うたら、つまりなにもないのよ、そこにそういうふうにあっただけなの、と平静に返事されるのであるのかな。例を引く。「わたしと」は、音楽をかける。短い会話。性交。笑い声。肌をたたく音。ののしりあう声。それらの物音もゆっくりと出ていく」(《もっとも官能的な部屋》)。

でも次のは、変？か、どうか。

「私は初めて詩を人前に出したときは、人前で性交する以上の恥ずかしさでした」(2003 年度東大駒場連続講義、一年生百数十人受講、R・キャンベル編『読むことの力』講談社。

また『小池昌代詩集』125 頁にも)。

拙文のせいで小池昌代が露骨な詩句ばかりの詩人と思われたら、それは全然違う。小池昌代は眼のパッチリしたきれいな人で、その詩は清く明るく、純粋度 100 パーセントの詩なのです。だから、その詩に触れればすぐにも小池昌代とずっと友だちになれる、とそう思う。詩集の他に小説集もたくさん図書館の棚にありますよ。南区図に『雨男、山男、豆を引く男』他、東区図に『厩橋』、西区図には最新刊『産屋』。

『タタド』・『ババ、バサラ、サラバ』・『どよどよ』(『黒蜜』収録) などおすすめ。去年刊の編著詩集『おめでとう』がまた、単刀直入、赤裸々の新婚祝品で、収録詩のあとの短い「鑑賞解説」がすばらしい。装丁がまたまっ赤っか。たじろぐほどの赤一色。



